

12. 学生の課外活動

1) ボランティア活動への支援

高知県立大学看護学部では、教員と学生が積極的に地域社会のボランティア活動に参加している。学生のボランティア活動を支援・促進し、人間や社会への関心を高め、さらに主体性の育成を支援するため、教員2名がボランティア委員として活動している。ボランティア委員は、ボランティアを募集する機関・団体と学内教員との橋渡しや、高知医療センターとの活動調整を行っている。

今年度は、COVID-19の感染拡大の影響により学外でのボランティア活動についても中止を余儀なくされたが、ボランティア活動再開に向けて学内でボランティア活動に向けての準備を重ねた。以下、本年度のボランティア活動への支援について報告する。

(1) ボランティア活動に参加する前の学生への支援

①学内で模擬ボランティア体験（11月・12月に計2回実施：1回生86名参加）

- ・模擬ボランティア体験では、車いす介助と視覚障がい者ガイドを中心に、介助者に求められる姿勢、具体的な車いすの操作方法や、介助方法について講義を行った。
- ・ボランティアでの介助体験として、屋内外に障害物別に3場面を設定して、それぞれの場面で介助を受ける役、介助をする役となり体験する機会を設けた。

②模擬ボランティア体験を通しての学生の感想

- ・車いす移送される体験や、介助を行った学生からは、「車いす体験をしたことで、歩くときよりもスピードを速く感じたり、段差を強く感じたため、丁寧な声かけが必要だと思った。」や「車いすに乗っている方の安全と安心に配慮することが大切だと感じた。」という感想が聞かれた。
- ・視覚障がい者として介助を受けた学生や介助をした学生からは、「視覚障がい者体験をしてみて、見えないと何も障害物がなくても障害物があるように感じる」や、「相手が介助者の存在を恐怖に感じない声のかけ方や触れ方を試すことができた。」という感想が聞かれた。

③模擬ボランティア体験の評価

- ・介助者として、どの時点でどのような方法で介助すると対象者が安心して介助を受けられるのかについてより具体的に考える機会となった。

(2) 高知医療センターでの活動

高知医療センターでの活動は、病院ボランティア「ハーモニーこうち」に例年は参加していたが、昨年度に続き、今年度もCOVID-19の感染拡大の収束の目途がつかず、ボランティア活動は中止となっている。次年度以降、活動の再開を待って、学生が主体的にボランティア活動に参加できるように支援を継続する。

2) 地域における活動

(1) 手話サークル

手話サークルは、手話の技術の習得のみならず、聴覚障がい者に対する知識・理解を深めるとともに、日常会話でよく用いられる手話にとどまらず医療の専門用語についても学ぶことを目的に令和2年に立ち上げた。現在、看護学部1回生1名、2回生20名、社会福祉学部2回生2名の計23名で活動している。

令和3年度は、当事者の方2名を大学にお招きし日常生活や入院時などで困ったことや日頃工夫している点などを学ぶことができた。特に治療を受けるときには、どのような治療を行うのか十分に理解できないままに治療が進んでしまっていることを知り、患者さんも治療に参画することが主流になっているなか、自分の治療に参画できない現状を理解することができていた。また、5月には、「手話×災害～避難者の中に聴覚障がい者は居る。あなたはどのように対応しますか？」を全

国の医療系学生約 50 人と Zoom でワークショップを開催した。このワークショップは、災害時に当事者は存在に気づいてもらうことができないことやアナウンスが聞こえないことにより情報を得ることができず孤立してしまうことなどが課題として挙げられていた。このような環境のなかで、手話ができる人がいることで聴覚障がいの方にとって情報を得やすくなるだけではなく、安心できる存在になると考えられた。しかし、手話ができなくても筆談やゆっくりと大きく口を動かすことでコミュニケーションができるので、積極的に関わろうとする姿勢が重要であることを学んだ。

本年度は、手話検定 4 級に 2 名が合格した。来年度は 2 級や 3 級を受験する予定である。手話の技術の向上とともに、当事者のニーズに応える活動をさらに展開できるように実施していきたいと考えている。

(2) 学生サークル：いけいけサロン活動

「いけいけサロン活動」は、看護学部 1 回生 6 名、2 回生 1 名、3 回生 12 名、4 回生 5 名の計 24 名で活動する結成 7 年目のチームである。このチームは平成 27 年 5 月、「地域の高齢者の方と一緒に交流したい」という看護学部学生と、住民の方の声があがり、「地域サロンを立ち上げたことで開始された。活動地域は高知市池地域である。令和 3 年度は、コロナ禍でも住民との交流を絶やさないことを目指し、新型コロナウイルス感染症の影響下でも、楽しめる活動を検討していた。このチームは、従来から住民の方と学生が直接顔を合わせることを大切にしてきたため、コロナ禍のなかで直接会えなくてもできることを 2 回生、3 回生、1 回生メンバーを中心に活動内容を検討してきた。4 回生は、この 1 回生・2 回生・3 回生を後方支援する形で活動し、全学年がそれぞれにできる役割を果たして、活動を継続してきた。毎月届けるサロン休止のチラシには、「チラシをみた住民の皆さんが笑顔になる」ことを意識して、季節の料理やクイズ、謎解き等を掲載して、協力の町内会をとおして住民の皆さんに届けた。そして、9 月の敬老会では、池地域の高齢者の皆さんに、手書きの絵や折り紙のついた手作りカードを各自が作成した。このカードは、町内会をとおして高齢者の手に渡され、地域の高齢者からは、喜びの声が聞かれた。コロナ禍での池地域での学生と住民の交流を、非対面のなかで実現してきた活動であった。

学生たちは、コロナ禍 1 年目の令和 2 年度に、「会えない状況でも、これまで築いてきた住民の方と学生の信頼関係・つながりを大切にすることで環境が変わっても住民の方との活動を続けていくことができる」と学んだ。この学びを令和 3 年度、1 回生に伝えた。コロナ禍も 2 年目となり、2 回生・1 回生からは、「もっと住民と交流したい」という声があがるようになった。3 回生は実習等で自分たちの学生生活も精一杯であるなか、何とかサークル活動が続くよう、それぞれに考え、役割を果たした。4 回生は、こういったメンバーの活動をみて、「直接みんなで話したり、活動することは難しい中でも、いけいけサロンらしさが小さなところで伝わっていて嬉しい」と話していた。

令和 4 年度は、1 回生・2 回生を中心に、今の意欲を形にできるよう、何とか住民の方と対面しなくとも直接的な交流が持てる企画を考案し、活動を前進させる予定である。このチームが 7 年間住民の皆さんと大切にしてきた信念を引き継ぐなかで、何を学び実現していくか、メンバーの活動への創造性に期待したい。

3) 災害支援に関する活動：高知県立大学災害看護学生チーム SIT

SIT は学生が主体となって災害医療を学ぶことを目的に今年度新たに結成された。母体は DMAS (日本災害医学会学生部会) であり、その研修に代表学生たちが参加したことをきっかけとして、そこで学んだ知見を学内でも共有する場を持ちたいと考え、結成されたものである。

現在、看護学部と社会福祉学部の学生総勢 27 名で活動している。主な活動として、勉強会を月に 2 回実施して、災害医療の知識や技術を習得したり、グループワークを行う勉強会を月 2 回開催して、災害状況を想定しつつ、多角的に考える力を身に付けている。勉強会では、「災害医療概論」

「CSCATTT」や「トリアージ」などを取り上げ、医療からみた災害の定義や災害要援護者、災害の種類などに応じた支援の在り方など基本的知識について学んでいる。その上で、過去の災害データを

もとに、災害の種類や、災害要援護者に必要な支援をグループワークで協議して、災害支援についての知識と技術の向上を図っている。

代表学生達は母体である DMAS が主催する研修会を通して、全国の学生とつながりを持っており、今年度は、四国の学生を対象とした災害医療のワークショップを主催するなど、他大学の学生と、災害医療の現状を現場の視点に近づきながら捉えるとともに、災害時の支援について語り合うことで、災害医療を通じたネットワークを拡げている。代表学生の「災害に備えて、全力で今できることに取り組んでいきたい」との熱い意気込みは、メンバーの学生にも伝わり、災害医療への興味関心がより深まり、広がりを見せている。

今後は、学内でも学生が自ら学んだことを活用する機会を設けるなどの応援を行い、また地域の方や他大学の学生とも相互交流を行う機会を増やすなど、災害医療を志す学生の輪が広がることを支援していく。